

古い書籍の修理のあとで
(山びこ学校)

< 1 > はじめに

暇ができると本棚の古い本を引っ張り出してみる。損傷があるものに出っくわすと「意思決定」を迫られる。捨てるか？ 捨てる前に要所のコピーをとっておくか？ 補修するか？ などなど。この悩ましい意思決定が、書籍を持っているがゆえの苦しみであり、楽しみにもなることもある。表紙そのものが痛んでいる場合は、図書館でも使われている「接着剤付き透明コートフィルム」でカバーをしてやる。表紙の装丁カバーが痛んでいる場合は、表紙や中表紙のコピーをとって貼り付けてからコートフィルムを付けてやる。薄い本であれば、大型ホッチキスで末端を綴じなおしたりすることもあるし、表紙や本体が崩壊し始めている場合には、製本テープを使って背中を固定をしたりもする。そんなこんなで、古くて痛んでいるが捨てられない本が蘇ってくると、読み直してみたい気分になることがある。

< 2 > 一冊の書籍の補修

「山びこ学校 ～山形県山元村中学校生徒の生活記録～」無着成恭編 が本棚の隅から出てきた。固く絞った雑巾で表紙を拭いてやり、次にアルコールで軽く拭いてやるとやや輝きが出てきた。これ以上磨くと壊れてしまうので、この状態で表紙をカラーコピーして上から貼り付けてやった。パソコンで画像の修正なども行ったため、新品の輝きが回復した。次は本紙周囲のカビのような汚れ、左手で固く握り、右手の消しゴムで周囲をこすり取り、掃除機で吸引。本紙のページはすでに茶色く変色しており、手荒にめくると欠けて（破れてではなく）くる状態なのでここで止める。最後に製本テープで背中を固定して、パソコンでプリントした書籍名（できるだけ原本の字体に似たフォントを使用）を貼りつけた。最後の仕上げは「接着剤付き透明コートフィルム」でカバー。

「1951年3月5日初版発行・1952年5月15日増補第18刷」と記された60年前の書籍は一応蘇った。見開きに「寄贈」のスタンプが押されているので、おそらく両親のいずれかまたは自分がどこかからいただいたものと思われる。

< 3 > 山びこ学校を読み直す

小学校の頃を静岡県富士山麓で過ごした。この学校は作文（綴り方）の教育が盛んで、作文や日記を頻繁に書かされた。そんな関係で「山びこ学校」の存在については教えられていたため知っていたし、読んだこともあった。

「山びこ学校 ～山形県山元村中学校生徒の生活記録～」という書籍名が示すように、山形県の山奥の中学校での、教師（無着成恭先生）と生徒たちとの1949年から1950年頃の生活記録を綴ったものである。無着成恭先生は後に東京のある学校に出て活躍された方であるが、この方の評価については多論があるのでコメントは差し控えることにする。

地元の方言で書かれており、要所に先生の翻訳や注釈が入っているが、慣れていないと読みにくいし理解しにくい所がある。私は5年生の時宮城県の山奥の学校に約一年間転校し、東北弁の体験があったので読んで理解することができたが、一般の人がすんなり理解するのは少々難しいかもしれない。

終戦後の復興と近代化の進展の中で、農村の暮らしがどのように営まれていたかが生々しく書かれている。

山形県山元中学校は、山形市から南西に15Kmほど入った山間の集落で1950年頃には農業・林業・養蚕などで生計を立てていた。さほど裕福な農村ではなく、集落の中にも貧富の差があり、子ども達も農業や林業の担い手として働き、学校へ通うことは二の次になることが多い。

こんな環境の中で様々な事件が起きる。

家業を手伝うため学校に来ない子ども、親を亡くしてしまう子ども、修学旅行の積み立てができない子ども、色々な事件が起きる中で、「助け合う心」と、物事に「何故だろうと深く考える心」を教えて行く。

「この村は、自分の家は何故貧乏なのだろう」事実を調べて正しくとらえて見ようという動きが始まる。

そして、どうすればいいのだろうかを子ども達なりに考えさせる。

修学旅行に行けない友だちの為に皆で貯金をする。家業の手伝いで学校に来られない友だちのために皆で応援に行く。そしてそれが発展して、「この村はなぜ裕福にならないのか?」「自分の家はなぜ貧乏のままなのか?」を考えて見る。

父の死を体験した子どもが、父は何を思い残して死んだのかを振り返る。

などなど難題に正面から取り組んで行く。こうした活動の記録が綴り方に書きとめられている。

「なぜだろうと考える習慣」「事実を自分で調べて見る」「調べたデータから自分で考えて見る」という物事への取り組み方、そして「友だちと助け合う」「友だちと力を合わせる」「全力を尽くす」などなどの生きることの基本を体で学んでいく。

昨今学校の教育が何を教えなければならないのかが見えなくなってきたという人もいる。子どもたちを守ることばかりが先行して、苦勞して学ばせることが重視されなくなってきたとも言われている。

子どもの頃に何を学んでおかなければいけないのか?

あらためて、示唆を受けたような気がする一冊の本だった。

以上



新装なった「山びこ学校」

60年前の本とは思えない艶やかな輝きに